

監訳者序文

獣医臨床神経病学において、最も基本となるのが神経学的検査である。神経学的検査は特別な道具や設備を必要とせず、また手技もそれほど難しいものではないため、習得すれば誰でも容易に行うことが可能である。しかしながら、神経学的検査（の手技）ができるだけでは不完全で、その検査結果から病変部位あるいは機能欠損部位がどこに局在しているのか（「局在診断」という）を導き出すのが神経学的検査の真骨頂であり、個々の患者の神経学的状況を最も正確に把握できる。それこそが神経科医が最も魅力を感じる所であり、難解なほど考察する楽しさを与えてくれる。それはCTやMRIなどの高度画像診断装置をもってしても達成されないのである。

神経学的検査から局在診断を導き出すためには、神経解剖学および神経生理学に関する一定の知識が必要となる；神経系は機能分化が著しく進んだ器官であるため、解剖と生理を関連づけて理解していく必要があり、「機能解剖」と呼ばれている。獣医臨床神経病学における機能解剖を理解するには、例えば Dr. de Lahunta の名著、『Veterinary Neuroanatomy and Clinical Neurology』や解剖学の大書 Dr. Evans とやはり Dr. de Lahunta による『Millar's Anatomy of the Dog』などを精読しなくてはならない。これは日常が忙しい臨床獣医師やこれから神経病学を勉強しようとする初学者および獣医学生にとっては極めて過酷な学習法になるだろう（その多くが挫折する）。一方、臨床家向けの良書、例えば『Handbook of Veterinary Neurology (Drs. Lorenz, Coates, Kent)』、『BSAVA Manual of Canine and Feline Neurology (Drs. Platt, Olby)』、『Practice Guide to Canine and Feline Neurology (Drs. Dewey, da Costa)』といった書籍では、もちろん神経学的検査と局在診断について記述されているものの、臨床徴候や疾患に関する各論が主体となっているため、神経系全体を通じた機能解剖を理解するには若干の物足りなさ、あるいは判りにくさを感じる。これらに対し、Dr. Thomson と Dr. Hahn による本書『Veterinary Neuroanatomy: A Clinical Approach』は、臨床神経病学で必須となる解剖学と神経学的検査や局在診断を理解・考察するために重要な機能解剖に特化し、学生や初学者にも判りやすい構成と美しい図や写真で解説している。また疾患についての解説をなくしたことで、本自体も容易に（挫折することなく）通読できる厚さである。またある程度臨床神経病学を学んだ、あるいは経験した獣医師にとっても、それまでの知識を整理する上で、あるいは復習する上で非常に有益なテキストになるだろう。このことから、本書（原著）は現在、獣医神経病学会で行われている基礎講習プログラムの指定参考書の1つになっている*。是非、これから臨床神経病学を学ぼうとする獣医師と学生は、本書を最初から最後まで飛ばすことなく通読し、また何度となく読み返して、神経機能解剖を理解していただきたい。そうすることで、将来目の前に現れた神経徴候を示す患者が「どうして」そのような徴候を示し、「どこに」原因があるのかが自ずと判ってくるであろうし、さらに神経病学の面白さに惹かれることであろう。例えば、私の恩師の1人であり、

*獣医神経病学会では、翻訳書一本書の利用は特に推奨していない。

獣医神経病学会の初代会長である徳力幹彦先生が「片側上位頸髄の背根を切断すると、反対側に捻転斜頸が生じる」という実験結果を話されたことがある。これは何故か？ 本書にもその具体的な解答は示されていないが、本書を通読すればそれが何故かを考察し、その機序を理解することができよう（本書を読み終えたあと、是非考えてみていただきたい）。

今回、この臨床獣医神経病において極めて有用な本書を監訳する機会に恵まれ、翻訳者にも私の信頼する神経仲間の各先生を迎えることができたのは本当に幸せの限りであり、翻訳出版を企画していただいた文永堂出版の松本晶氏と翻訳者の諸先生方にこの場を借りてお礼申し上げたい。

なお、監訳するにあたり、解剖学用語については日本獣医解剖学会編『獣医解剖・組織・発生学用語』を参照した。また臨床用語は主に獣医神経病学会等で用いられている標準的な用語を充てている。十分に注意して監訳を行ったが、誤解なきよう各章において初出の専門用語には英語を併記しているので、併せて参照していただきたい（英語併記にしたのは、英語の方も覚えていただきたいという目的もある）。

平成 28 年 3 月吉日
長谷川 大輔